

後家ごけになつてからいつとはなしに遠とほざかつてしまった親類しんるいへ、フミは何度なんども足を運び、恥はじを忍しのんでいくばくかの金子きんすを借かり受うけた。

そして、それを返済へんさいするために料理屋りようりやの仲居なかいをして夜よるも昼ひるも働はたらいたフミ。その過勞かろうが結果けつかけ的には命いのちを縮ちぢめる結果けつかけになつたのを、露ふきは胸むねの痛みいたと共に、しつかりと心こころに留とどめている。

しかし、

「お前まえを女学校じよがっこうへ上げておいてよかつた…」
長山家ながやまけとの縁談えんだんがととのつた時とき、肩かたの荷にを下おろしたように、呟つぶやいたフミの声こゑもまた、露ふきの中に鮮あざやかに残のこっている。

当時とうじ、中學校ちゆうがっこう、女學校じよがっこうへ進學しんがくするのは、村むらで

熱あついお茶ちやに四し、五枚ごまいのせんべいを添そえて、信次しんじの書齋しょさいへ行いつた。

信次しんじは炬燵こたつに足あしを入れ、二つ折ふたりにした座布団ざぶとんを枕まくらに寝ねころがっていた。

常に何なにかをやっていると氣きのすまない信次しんじにしては珍めずらしいことであつた。

「風邪かぜをひくのに…」
露ふきは盆ぼんを置おくと押入おしいれから毛布もうふを出だして、信次しんじの身体からだに掛かけた。

毛布もうふを掛かけられながら、信次しんじは、少すこしのみじろぎもしなかつた。だが、眠ねむっているのではなかつた。かつきりと見開みひらかれた眼めには、明めい確かくな意思いしの動うごきが、はつきりと見みえていた。

も数かずえる程ほどしかなかったが、機き会かいがあるならば、人間にんげんはやはり学まなばねばならない、と露ふきは考かんがえていた。

母ははの心身しんしんを削けずりつつ女學校じよがっこうへ進すすんだような露ふきであつたが、知らなかつた世界せかいが次つぎ々に開ひらけていった學校生活がっこうせいいかつの充實感じゆうじつかんを思おもい返かえすとき、母ははには、いくら感謝かんしゃしてもし切きれないほどの思おもいを深ふかくしていた。

修造しゅうぞうが息子むすこの希望きぼうを叶かなえてやるため、自分じぶんの体裁ていさいなどかなぐり捨すてて長山家ながやまけへやつてきたその姿すがたは、とりも直なおさず、かつてのフミの姿すがたなのであつた。

露ふきは夜よなべを打うち切きつた。

今いま、信次しんじの脳裏のうりを往ゆききしているのは、修造しゅうぞうの一件いっけんではないだろうか。信次しんじの心こころは、いつになく揺ゆれ動うごいている、と露ふきには思おもえた。

露ふきは、湯呑ゆのみの盆ぼんを信次しんじの枕まくらもとに置おくと、
「あのなあ。修造しゅうぞうさんのことやけど…」

と話を切きり出した。

信次しんじは、むつくりと起き上あがった。湯呑ゆのみをとると、ひと口くち、茶ちやをすすつた。

「わたし、母ははのことを思おもひ出だしてなあ。修造しゅうぞうさんを見みると…」

「何とか、お金かねのこと、考かんがえてあげてはくれませんか。わたしからもお願ねがいします……」

親類しんるいから、金かねを借かりて帰かえつた夜のフミの、安堵あんど

と疲労のまじった表情が、頭の中をよぎった。
信次は、ゆつくりと湯呑を盆の上に返した。

「お前から頼まれるすじあいはない…。」

低い声であった。だが、切りつけるような鋭さがこもっていた。

露は黙った。すんなり聞き入れてもらえるとは最初から思っていなかった。

(このまま、引き下がってはいけない…)

フミと修造の姿が二重うつしとなって、露の脳裏には灼きついていた。

「なあ…」

露がもう一度、言いかけるのと、

「もうええ。聞きとらない…」

再びごろりと横になりながら、信次が投げ捨

てるように言うのとが同時であった。

「親心、親心、と、いったい親がどうしたとい

うんじや。親なら自分の金で学校へやってやれば

ええ。人の金を当てにしおって…」

親心にこだわる信次の、底流に流れているも

の实体がわかるだけに、露は切ない思いをかみしめた。

しかし、

「貧乏人の考えることは、どうせそんなところ

じや。」

天井を見上げたまま吐き捨てた信次の次の

言葉は、鋭く露の胸を突き刺した。

(貧乏人！)

膝の上に重ねていた手を、露は思わず解いた。

「あんた。今、何と言いました？」

「何や。」

「貧乏人、やなんて。ひどいことを…」

「何がひどい。事実は事実だろうが…」

「誰も、貧乏になりたくてなるんやありません。

そんな見下げたような物言いは…。わたし…。」

語尾が震えた。

貧乏人などと、侮辱に満ちた言葉を軽く口にする信次がかなしかった。

「人間は…みんな平等やというのに…。それやの…」

涙が前掛けの上に、ひと粒、ふた粒落ちて布地に沁みていった。

「ほう…」

「ほう…」

信次が、急にはね起きた。

電灯の光芒の中をよぎった影が、壁に大きく揺れ動いた。

「お前、えらいんじやのう。人間は平等か？」

俯向いている露の顔をのぞきこんで、信次は薄

く笑った。

「女学校でそう習いました。お金のある人もない

人も、みんな人間としての違いはないんやって

…。」

消え入るような声であったが、それでも露はせ

いっっぱい続けた。

「やめてくれ！」

突然、信次が叫んだ。

「何や、小ざかしい。平等やの、何やのと、……。」

女学校出たぐらいを鼻にかけるな。」

勢いよく立ち上がった信次は、廊下との境の

障子を、手荒くいっぱいに開いた。

廊下に淀んでいた冷気が、さあっと部屋に流れ

こんだ。

露はふり向いた。

信次はガラス戸の前に立ち、こちらに背を向け

ていた。

ガラス戸の向うが、夜目にもうつすらと白かつ

た。

雪であった。春の雪であった。

目をこらして見ると、闇の中に、花吹雪のよう

な雪片が舞っていた。

畳からのぼってくる冷気が膝から腰に伝わり、

身体が文字通り凍てつきそうであった。

だが、露は、動けなかった。

身体と共に、心も凍ってしまったように思わ

れた。

たった今、信次の放った言葉が、いくつものガ

ラスの破片となって露の心のあちらこちらに突

き刺さり、その一つ一つの傷口から血が流れ始め

ていた。

「長山家にふさわしいかしこい嫁じゃ。何しろ女
学校出じゃけんのお。」

露が嫁いできた頃、長山の両親は、ことある

ごとにそう言って露を愛でてくれた。

露は嬉しかった。そうされることによって、母、

フミの労苦に少しでも報いられるような気がし

た。

「お前は頭のええおなごじゃ。わしらの子には、

きつとかしこい子が生まれるぞ。」

枕を並べた閨の薄闇の中で、信次もその頃、

よくそうささやいた。

このところ、思い出すことも稀であった幸せ

色の記憶を必死でよみ返らせ、そうすることによ

た。

雪であった。春の雪であった。

目をこらして見ると、闇の中に、花吹雪のよう

な雪片が舞っていた。

畳からのぼってくる冷気が膝から腰に伝わり、

身体が文字通り凍てつきそうであった。

だが、露は、動けなかった。

身体と共に、心も凍ってしまったように思わ

れた。

たった今、信次の放った言葉が、いくつものガ

ラスの破片となって露の心のあちらこちらに突

き刺さり、その一つ一つの傷口から血が流れ始め

ていた。

つて、今、胸の中で血を流している傷口の痛みを、

露はなだめようとした。

急に背後で、障子のしまる音がきこえた。

露はふり返った。いや、ふり返ろうとした露の、

その眼の前に信次が突っ立っていた。

信次の丹前のはだけた裾が、露の顔に触れんば

かりのところにあつた。

露は信次の顔を見上げた。見下ろしている信次

の視線とぶつかった。

信次の瞳は、まなじりが裂けるかと思われる

ほど、かっと見開かれていた。

その眼の光に異様な粘りを見いだしたとき、

露は、次に何が起こるか、を察した。

反射的に、膝をにじらせ、後ずさりをする露を
追うように、信次が一步前へ進んだ。

「どうして!？」

のどからやつと絞り出した声で信次をなじろう
としたとき、露の唇はすでに、おおいかぶさつ
てきた信次の口によってふさがれていた。

信次は、露の両足を、着物ごと割った。

必死に抗いながら、露の頭は混乱していた。
疾風のように襲ってきた信次の荒々しい行為

は、思考も理解も与えないまま、露をもみ砕いた。

恐怖に似た感情が、露の中に湧き起こった。

信次の大きな身体は、火のように熱かった。だ

が、露は、夫のすさまじい抱擁の中でただ冷た

く打ち震えているばかりであった。

信次は、露の身体をもみしだきながら、口の中
でうわごとのように何ごとかを呟いていた。

露は、その言葉を聞きとろうとした。

「……馬鹿にしおって……石女のくせに……醜
女のくせに……ぬかしおって……。」

呪文のようくり返すその一語一語を、ようや

く明確に耳にしたとき、露は思わず全身が粟立つ
のを覚えた。信次を渾身の力で突きとばした。

身体をねじるような恰好で露からとびのいた

信次は、着崩れた丹前姿のまま、畳にぺたりと

坐わり、荒い息を吐いた。

部屋の空気が急に熱くなったようであった。

露は起き上がった。乱れた着物をととのえ、髪
の乱れを直した。

信次には、一瞥も与えなかった。

下からすくい上げるように、露を見つめている

信次の眼は、まだ血走っていた。

(以上2月17日放送分)